『劔岳 点の記』をよりよく理解するための解説

初期の登山者と地図
―前編：「陸測の5万」図ができるまで

(財)日本地図センター／(株)アイ・エヌ・エー
国土地理院客員研究員　長岡 正利

旅人が見た劔岳・立山

江戸時代の文化・文政期（19世紀初め）を代表する南画家，谷文晁に「立山」を描いた『名山図譜』がある（図－2）。地獄の針の山に喩えられていた劔岳が，絵の左半を占めている。立山連峰を望む富山平野からの眺めのようで，50mDEM（国土地理院「数値地図」標高）により，「カシミール3D」（http://www.kashmir3d.com/）でこれを再現すれば図－2の下のようになり，文晁が写実を旨としていたことがよくわかる。旅を愛した文晁は，蝦夷地から九州までの旅を通して，街道から望んだ山々や，名山の誉れが高かった山をまとめた。

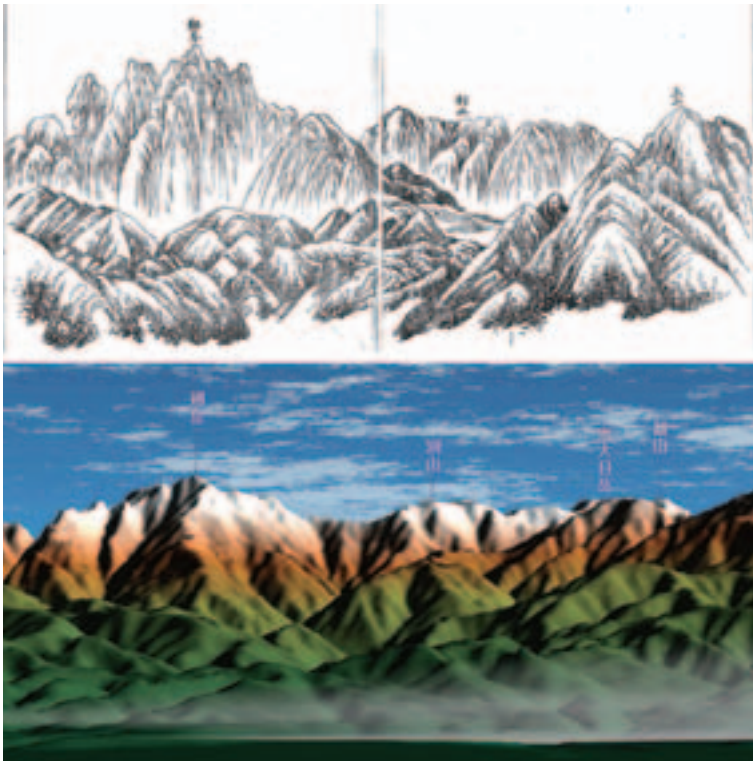
時代が明治となって，山岳信仰・登拝とは別に，近代的登山・旅行の気風が盛んになるとともに，志賀重昂の『日本風景論』（明治27（1894）年）をはじめとして，わが国山水の美の優れたることを啓蒙する書が多く世に出た。その頃から，憧れの対象としての山々は近代登山の対象としての日本アルプスのようなものに変わっていった。また，近代アルピニズムの勃興とともに，登山者にとっての地図は不可欠のものと考えられた。

明治初期のこのあたり

近代化・殖産興業の波の中で，人の移動と物の流通は活発化した。一方では，日本の沿岸沿いの鉄道網が完成するまでは，江戸時代そのままに，河川の舟運や目的地を直線で結ぶ内陸交通がさかんであった。

このあたりでは，富山からまっすぐに信州大町を目指して，立山山間部に幅9尺（3m）の有料道路が建設されたりした。図－3は，その新道開通についての広告チラシで，本誌2月号で紹介のあった「立山曼荼羅」の形をとっている。明治の廃仏毀釈とともに信仰登山は衰退するが，地元越中では男子16歳で立山登山をなさねば一人前とは見なされなかった伝統的風潮がなお残るなど，立山へのあこがれ

図－1　輯製20万分1図「高山」（陸地測量部，明治23年輯製・同年4月出版：原寸×0.9）



図ー2　谷文晁の『名山図譜』から「立山」と，それにあわせて作ったカシミールCG（EOS/相澤紘さんによる）

図ー3　「立山新道」開通の立山曼荼羅を模した引札「針の山」劔岳は左に（×0.2）

と登山の気風は盛んであった。立山曼荼羅は，山麓の宿坊衆徒（導師）が，立山開山縁起や山麓・山中の名所旧跡を絵解きで視覚的に説明したものだが，その形をとりつつの新道の紹介と，右下には，北アルプスを越えての各地への里程記載があり，この道を経由しての善光寺参詣も行われていたことがうかがえる。現代の立山黒部アルペンルートは観光客が対象であるが，この道は荷を積んだ牛が往来する物流の道であり，有料道路のはしりであった。

国家の経略としての地図作成

明治初期の我が国においては，国家経略の手段として，地図は不可欠のものとされた。西南の役などの叛乱が続発した初期には，参謀本部測量局により，帝都防衛のためとして明治13～19年という短期間に関東平野全域の2万分1迅速測図が完成（921枚の測図原図）された。

明治新政府の各省は，それぞれの所管事業の推進のために正確な地図を必要とし，そのために独自に地図作成事業

図ー4　農商務省地質調査所の20万分1地図「富山圖幅」（地質調査所，明治23年印行・同24年4月出版：原寸×0.9）

図－5　最盛期の立山温泉（『日本地理大系』改造社，昭和5年）

に着手していた。それらのうちの基本的な事業は，やがて陸地測量部（明治21年設置）に統合された。

陸地測量部は，全国の輯製20万分1図（図－1）を作るが，それに先だって（北海道）開拓使（後に北海道庁）が20万分1北海道実測切図を完成。地質調査（地質図作成）や国有林野管理のために，農商務省は独自の20万分1地図（図－4）などを同時期に完成させた。

陸地測量部の柴崎測量官（陸地測量手）らによって，劔岳周辺の山岳に三等三角点が設置・測量される頃には，図－1や図－4の地図が広く利用されていた。

図－1と図－4を比較し，現代の20万分1地勢図も見れば，当時の陸地測量部の地図はまさに「伊能図ヲ基礎トシ各府県調整ノ地図ヲ校丁参酌シ」た程度のものでしかないことがよくわかる。劔岳も，大日岳北西のあらぬ位置に表示されている。対して，農商務省の地図では，立山の室堂周辺の詳しさや，北アルプスを越えて大町へ抜ける道（図－3の有料新道）の状況など，明らかに現地踏査をふまえていることが判る。なお，惜しむらくは，後に，国土の測量・地図作成が一元化されていく過程で，これら初期の測量成果は多くが失われてしまい，その事績そのものが忘却され，あるいは（意図的に？）記録されなかった。

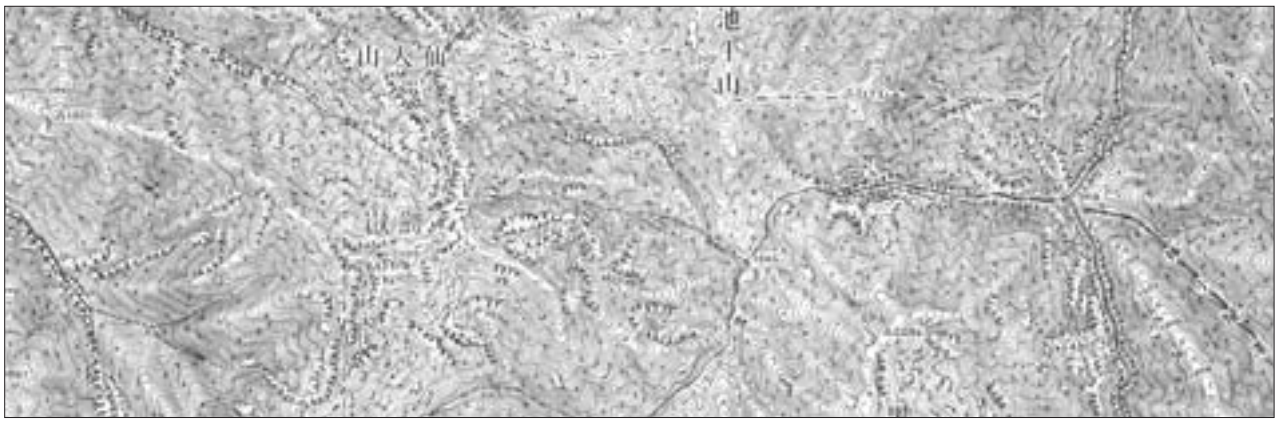
ところで，登山の気風の勃興の中では，5万分1地形図の早期刊行が望まれたことは想像に難くなく，そのような中で，地元新聞社による「東京の山岳会と陸地測量部の劔岳登頂争い」ムードも勝手に盛り上げられてしまった。

劔岳登頂についての私見だが，新設三角点撰点のためにこの一帯の山頂を跋渉していた柴崎らの一行は，劔岳東面の山々にも登頂・撰点しているが，東側から劔岳を見れば，後に名付けられた長治郎雪渓や平蔵雪渓が夏の前半まではほぼ頂上の近くまで途切れることなく続いており，標石と造標資材の運搬を別にすれば，雪渓沿いに登頂するだけならばそう困難ではないと確信したものではないだろうか。ただ愚直に測量業務を推進する立場の柴崎らにとっては，「劔岳初登頂争い」煽動も，迷惑な話であったことだろう。

登山の隆盛と５万分１地形図の完成

三角測量の成果を受けて，陸地測量部地形科による現地測図作業が大正元（1912）年に行われ，異例の早さをもって翌年7月には地形図（図－6）が仮製版で発行された。大正から昭和初期にかけて登山者はさらに増えて，図－5の立山温泉（柴崎測量官一行が作業拠点としたが満員のため冷遇された）は，最盛期1日500人でにぎわったといわれる。

ところで，この地域の地形図は発行されたものの，「これでメデタシ」とはならなかった。地形図の発行直後から，既にこの一帯を知悉していた山岳会などから大きな問題点が指摘された。陸地測量部は急遽，地上写真測量によって北アルプス全域の地形図を修正するなど，後の空中写真測量の研究にもつながるのだが，それは「後編」で紹介したい。（参考文献は，まとめて「後編」に。）



図－6　5万分1地形図「立山」（大正元年測図・2年発行）にみる劔岳周辺から黒部川本流（右）まで（原寸×0.8）